

私の研究史〈井口 隆史〉

グローバルな交流を通じた林業経済研究の楽しさ

聞き手：大津裕貴*、李婉**、田中奈緒美***

日付：2022年11月9日、2023年3月1日・4月
27日・5月18日・6月15日

場所：島根大学生物資源科学部3号館216室
(島根大学・寧夏大学国際共同研究所分室)

背景

井口隆史・島根大学名誉教授は、造林政策研究を中心に農家林家の生活面に注目しながら研究を進めた。その研究手法は、地域との交流を大切にしながら、現場の実態把握を丁寧に行うというものである。今回、人のつながりを大切にしながら研究を続けてきた井口氏に「交流」を通じた林業経済研究について伺った。

1. おいたち

うちの家業は家具屋でした¹⁾。林業経済研究とのつながりという意味では、木を扱う職業ではありました。職人の家ですから、本当なら家の手伝いをするような育ち方をしないといけなかったのだと思いますが、ほとんどしたことがありません。私は体が弱かったんです。小学校5年生になる前の春休み頃から病気になる、1年ほど家で療養していました。親としては、次の代をやってもらえと思っていたのですが、残念ながら、それはできないということになりました。弟が跡を継ぐことになり、私は京都府立大学へ入学しました。ですが、その頃からまた体調が悪くなり、家で寝ていました。大学は1年間の休学を経て、5年間で卒業することができました。でも、京都府立大学で学んだのは森林経理学で分野が違いました。林業経済学は修士課程に入ってから勉強しました。

学部卒業時は、林業職の公務員になるのが選択肢の1つで、試験勉強もしていました。ですが、林業職で採用された場合、山の中で仕事をするのは、やっぱり体が心配だったんです。そこで、同じ公務員でも公設の試験場へ行くことができればよいと思っていました。しかし、残念ながら、卒業の年から学士だけでは採用しない募集要件に変更になりました。それで、体力的に普通の山官とか、山の技術者にもなれないし、試験場にも行けない。行くところがないから、大学院に進学するしかなかったという感じです。

2. 林業経済学の勉強を通じた縁

京都府立大学で習った森林経理学と大学院で学ぶことにした林業経済学は大きく違う印象でした。当時、京都大学の研究室は、半田良一²⁾教授、森田学³⁾助教授、有木純善⁴⁾

*ダムの見える牧場

**鳥取大学大学院連合農学研究科

***島根大学・寧夏大学国際共同研究所

主な経歴

西暦	経歴
1967	京都府立大学 卒業
1969	京都大学大学院農学研究科（修士課程） 修了
1969	島根大学助手 赴任
1977	島根大学講師
1980	島根大学助教授
1986	内地留学（京都大学：1986年5月～1987年3月）
1987	農学博士（京都大学）（博士論文：公社造林論）
1989	島根大学教授
2006	島根大学定年退職（島根大学名誉教授）
2006	島根大学・寧夏大学国際共同研究所所長 （2008年まで寧夏回族自治区銀川市へ赴任）

講師、北尾邦伸⁵⁾ 助手、村尾行一⁶⁾ 助手でした。新しく入ってきた院生を中心とした学生に対して、助手の若い先生が経済学の基礎から熱心に教えてくださいました。助手の先生の1人はケインズの『一般理論』を教えてくださいましたし、もう1人はマルクスの『資本論』の勉強をみてくれました。準備は大変でしたが面白かったです。みんなよく勉強しました。競争ではないけれど、熱心な助手の先生に引っ張られて、学生も院生もみんなが一生懸命勉強していました。

京都大学の研究室には学生もいるし院生もいるので、研究報告するような集まりが自然にできていました。学部生や大学院生や先生方が集まって研究報告して、みんなで質疑応答したり批判したりしながら研究を進めていました⁷⁾。研究報告の時に厳しく意見されるのは、村尾行一さんでした。森田学先生もそうだったかもしれません。森田先生の指導は、何というか、理屈にきちんと合うような報告を求められました。半田良一先生は直接いろいろな意見を出されるという感じではなく、状況を見て必要なところで意見等を出されるという感じでした。

大学院生でいえば藤原三夫⁸⁾ さんが印象に残っています。私が大学院へ入った頃に彼も大学院生でした。非常に優れた人で、いろいろなことを自分で始めて研究を進めていました。教えてもらうことも多かったし、手伝ってもらうことも多くありました。

だけど、大学院2年生頃から大学闘争が激しくなり、勉強どころじゃない雰囲気になりました⁹⁾。それでも、2年で大学院を修了しようと思えば修士論文は書かないといけない。不十分でしたが、最低限の修士論文だけは書いて修了しました。

それで、大学院に2年間行った後は、島根大学に助手として赴任することになりました¹⁰⁾。

3. 地域農林業を対象とした研究と交流

造林研究と博士論文

私が博士論文を書いたのは、島根大学に赴任した後になります。京都大学へ内地留学して、島根県を調査地とした『公社造林論』¹¹⁾を1987年に提出しました。島根県林政にとっては、公社造林を扱った研究は大事だとは思いますが、なぜ公社造林が博士論文のテーマになったのかな。自分でも覚えていません。

びっくりした話になるかどうか分かりませんが、以前は個人というか、自分の家は自分

でつくり、自分の山も自分でつくっていました。ですが、ある時期から、公社や公団等、以前とは違う形で針葉樹造林が進み、各地の林業が進んでいくような状況になりました。公社造林には良い面もありますが、結果としてどうだったかということだけでなく、もう少し理念的な議論もあった方がよかったのかもしれませんが。しかし、島根県で考えれば、公社とか公団造林でなければ、なかなか造林できなかったというのが現実でしょう。島根県にはたたら製鉄の御三家以外、元々まとまった山持ちがほとんどいないので、林家による自家造林まで意識が向かなかったのかもしれませんが¹²⁾。

博士論文を書いている時は、最後のまとめのところで、藤原三夫さんがいろいろなことを手伝ってくれました。学生をうまくまとめて、いろいろなことを教えてくれたり、助けてくれたりしました。後に、藤原さんは愛媛大学で教授になります。愛媛大学在職中に交通事故で亡くなったのですが、定年まで元気でいたら大活躍していたと思います。惜しい人でした¹³⁾。

農家林業による山林管理

現在は、山持ちさんは山を持っても放置の状態ばかりです。放置の状況をどうしたらいいかということになると、山を手入れしてそれなりの手応えがないと関心を持ってもらえない。お金にできるとか、立派な森林になって何かしらに使えるとか。しかし、山の管理をして良い変化を感じるような状況にはなかなかありません。うまくやれば何とかなると感じられる、そういう状態であればいいのですが。

島根県で考えても、今、山の手入れを熱心に行っているという事例はあまりないのではないでしょうか。御三家は取り組んでいるのかもしれませんが、あれは例外ですね。生活費を稼ぐ仕事をしつつ山も管理するというのではなくて、山を中心に、農業と山でもいいですが、農林業でちゃんと生活できている人がたくさんいればいいのですが。10年、20年前においても、島根県の林家、林業家はそれほど多くありませんでしたが、そうはいつでも、かつては、20haや30ha、もう少し大きい面積の山林を管理しながら林業をやっている人が何人かはいらっしやいました。基本的には農業がメインで、副業として山林管理をしている方たちでした。食べていくのは米で、林業はそれに若干のプラスぐらいでした。

ですが、最近、そういう方の様子も聞かないので、どうされているのか、もうできなくなってしまったのかもしれないですね。いや、こちらが聞いてないだけかもしれません¹⁴⁾。

地元の人とのつながり

研究者の地域貢献といっても、どれぐらい役に立つことができるかは別問題だけど。私たち研究者は仕事でさまざまなところへ調査や聞き取りに行ったりしています。時々必要に応じていろいろな活動をしているので、聞かれたことに対して情報提供できるぐらいの知識を持っています。例えば、各地の産地がどうなっていて、今ならこの産地の状態を見れば参考になるとか、関連のありそうな取り組みをやっている産地があるとか、そこへ行くのであればこの人に連絡すれば大体何とかなるなど、さまざまな契機になるような情報を提供できることが大切だと思います。

地元の人にいろいろな情報を提供するのは、あちこち行った我々の役割でしょうね。地域の人たちと交流しながら、やっていることを教えてもらいながら、こちらもいろいろな情報を提供したりできる。ですから、それぞれの地域に大学があることは重要です。研究組織がそこにあり、地元の人たちと交流して非常に深く理解できている。そういう人が、

あちこちにいることはプラスになると思います。

4. 林業経済研究を通じた国内外の交流

師恩

半田先生との交流でありがたいと感じたのは、島根大学に赴任して以降も、私を書いた論文等に目を通してくださり、手紙やハガキなどで意見を伝えてもらえることでした。書き終わってよかったなと思っていたところに手紙が届いて、良いと感じたところはこういう点で良い、こういうところはもう少し深めると良いとか。良い点は言ってもらおうと嬉しいし、これはこうしたらいいんじゃないかと言ってもらおうと、その通りだなと思って次に向かうとか、意見を言ってもらえるとこちらも元気が出るしね。要するに、自分のところにいなくなっても、修了（卒業）生の書いたものに目を通していろいろ感じるころは伝えて指導してもらいました。そういうことに配慮してくださる先生でした。本当に、ありがたかったです。

何というか、中心的な大学というのは人材育成の役割も担っていたんでしょうね。少なくとも、東京大学とか京都大学とか九州大学とか、多くの研究者を抱えている研究室では責任者の先生方の何人かが少し目配りをされていたのかもしれませんが。そういう意味では、昔の講座制は、講座の中でいろいろな議論もするし、講座から離れた人との関係も維持されていました。研究会があれば、みんなで集まって議論しました。

だから、全然そういうことも分からないで入った私は、丁寧に育ててもらってありがたいという感じでした。やっぱり、ああいうのは必要だと思います。誰かがだんだん上の方にいくためには、きちんと指導してくれる人、良いものは良い、ダメなものはダメと言ってくれる人が必要です。学会も意見をもらえるという面はありますが、割と遠慮してしまうところもあるので、意見を伝えやすいという点で講座というのは、意味を持っていたのでしょう。私が勉強した頃の京都大学が、昔の講座制のつながりがうまくいっていた時期だったのか、場所だったのか、人の関係だったのか分かりませんが。

でも、それを地方の大学でやろうとすると、教員が少人数で多忙だから、うまくいきにくいところがありますね¹⁵⁾。

学友と催した研究会の楽しさ

研究を通じた交流といえば、西日本林業経済研究会¹⁶⁾は楽しみでした。西日本林業経済研究会は、半田先生とか森田先生だとか、大先生が若かった時に立ち上げられたのでしょう。

研究会の開催時期である夏休みの間は、大学のあるような都市は標高が低いので蒸し暑い。そんなところを逃れてというか、涼しいところで気軽に意見交換しようというのが出発です。西日本の大学で順番に幹事を担当して、現場を見たり、議論したり、さまざまな私的な交流もある研究会でした¹⁷⁾。そういう意味では、みんなで半分楽しみながらやった夏の研究会は非常にいい集まりだったと思います。特に若い人が熱心で、会の中心がだんだんと下の世代にきたら、次の世代の研究者も一生懸命に運営をやりました。学会等で、今まであまり注目されていなかった産地の様子を報告したら、そこを見てみたいということになり、研究会を企画したりしました。それぞれの産地で各地の大学と付き合いがあり、業界の人と交流しながら勉強することが、あちこちでできました。私たちであれば、当時の調査対象地は津山・勝山の辺りで何度も何度も行っていた¹⁸⁾ので、業界の人とさまざまな交流が沢山ありました。さらに、西日本林業経済研究会の中で、若い人だけ

が集まって面白いことをやろうという動きもありました。別名「酒乱会」¹⁹⁾という勝手な命名をして、西日本林業経済研究会とは別に集まっていました。酒乱会も、世話人が、いや今回は天竜でやろうとか、勝山へ行こうとか提案して各地を回りました。各地で集まるような研究会であれば、普段の研究活動では見られないようなことを、例えば天竜の方に行けば見ることができる、ああ、こういうところがあったということを知り、研究対象地域の見方もいろいろな影響を受けるなど、多くのさまざまな影響があったと思います。

やはり、研究では対象との交流があるから本音が出てきたり、いろいろなことが分かるのであって、表面的な現地調査だったら本当のところはなかなか出てこないでしょう²⁰⁾。特に業界の人は、内情まで話してくれるなんてありえない。信頼関係ができて、日頃から交流があって実態も把握していて、向こうもそれを承知でいろいろ教えてくれる。研究方法としては、その方がいいと私は思います。

もちろん、研究者同士の交流も、ものすごく大事だと思う。同じものを見ても、それぞれどう感じているのかとか、そういったことがいろいろ議論されて自分の身につく。それは非常に大事なことだと思います。ものすごく優秀な人で、他人の意見など必要としないで、自分で全てやっていけるという人がいれば、それはその人のやり方なのでしょう。しかし、文殊の知恵じゃないですが、さまざまな人が集まって交流した方がいろいろな議論ができると思う。議論するのは大事だし、自分の意見と違うことを言われても、自分の身になるから。まあ、議論の中で自説が否定されたりして悔しい思いをすることもあります。それは、しょうがないですね。

とにかく、大学というところは人と人との交流がないと発展しにくいと思います。議論して同じものを見ても見方も見え方も違う、他の人の意見が参考になったり、自分も反省したり。それは、プラスばかりではなくて、マイナスもあるかもしれませんけど。

留学生との出会いから発展した国際交流

中国の寧夏回族自治区に行ったのは、当時島根大学大学院修士課程の留学生だった胡霞²¹⁾さんの研究の現地調査として1987年に訪問したのが最初です²²⁾。1987年の調査は寧夏社会科学院と共同でやり、担当者が寧夏大学に異動してからは寧夏大学と島根大学の交流も始まりました。その後は、科研費を使って共同研究をやったりしました。大学間交流は北川泉²³⁾先生が島根大学学長の時に始まり、2004年に円借款プロジェクトによる島根大学・寧夏大学国際共同研究所設立につながりました²⁴⁾。

島根大学・寧夏大学国際共同研究所は新しくできた研究所ですので、誰かが現地にいないといけないのですが、長期的に寧夏へ行ける人は限られていました。それで、今までに一番、寧夏に行ったことがある人という程度の理由で、私が研究所の所長として現地に赴任しました。島根大学を定年退職した2006年から2008年まで現地赴任しました²⁵⁾。

現地では寧夏大学にじっとしていたわけではないですよ。調査とかで、寧夏の南の方にはしょっちゅう行きました²⁶⁾。いろいろ面白い経験もしました。ですが、中国でいろいろ調査したりしましたが、あまりきちんとした論文が書けませんでした。残念ながら。

何というか、中国はデータ収集がしにくいというか、基礎的なデータがないような印象を受けました。日本であれば、何県何町がどのようなことをやっているのかは、調べれば過去のことも現在のことも分かりますが、中国では、そのようなデータは見たことがありませんでした。東北林業大学へ集中講義に行った際も、林業関係のデータを示してもらうことはありませんでした。東北林業大学のある黒竜江省のあたりは、きっと林業が盛んなところだと思いますけどね。南京林業大学へ講義に行った時も、江蘇省あたりの林業の話はありませんでした。中国の先生と日本の先生とは関心もちょっと違うのかもしれ

ません。

やはり、中国では統計的な数値がきちんと地域別あるいは町村別とかになってないのかな。いや、そういうものを見せてもらったことがないだけの話かもしれません。中国にもそういったものがあるのかもしれませんが、まあ、必要なかったのでしょうか。しかし、長い目で見たら、正確にデータが記録されている方がいいと思います。きちんと記録しておいたら、中国はこれからもっと研究活動がしやすくなると思います。

5. 若者へ向けてのメッセージ

子供の頃の思い出というのはもう、はるか遠くになってしまいました。島根もずいぶん変わりました。それは仕方がないことでしょう。我々は先はそれほど長くはないですが、皆さんはまだ何十年も頑張らないといけないから、社会がいい状態であればいいんだけどね。これからどんな社会になっていくのだろう。いい方に変われればいいけど。

本当に、これからは外国の人も大事にして、一緒に何かできるといいんだけどな。日本人はそういうことは下手だね。外国人っていうだけで自分らと違う人たちという意識になってしまう。交流が元々あまりなかった。なくてもやれたというか、そういう国だったから。だけどそれでは、これからやっていけないと思う。国境というか、国と国の間の何かかっていうのは、取り払っていかないと。どこまでそれができるのか。我々が生きているうちにはもうなかなか難しいでしょうが。

若い人にこれからも頑張ってもらわないと、やっぱり年寄りだけではダメだね。若い人がもっと声を上げていくと、社会とか国も変わってくるかもしれない。頑張ってください。応援できることがあれば言ってください。

※井口氏の有機農業運動などの活動については、島根大学法文学部山陰研究センター紀要『山陰研究』第16号（2024年3月）に掲載。

注

- 1) 井口氏は1943年京都府生まれ。京都府立大学を経て京都大学大学院農学研究科で勉強した。修士課程修了後は島根大学に赴任し、現在は島根大学名誉教授。
- 2) 半田良一氏は1925年生まれ。京都大学講師、助教授を経て京都大学教授、中京短期大学教授を務めた。京都大学名誉教授。井口氏の指導教官や博士論文の主査を担当し、2006年に松江市で行われた井口氏の退職記念講演会・祝賀会にも参加するなど後々まで交際が続いた。峰尾・松下（2017）において、「私の研究史」が公開されている。
- 3) 森田学氏は1926年生まれ。松山大学、愛媛大学を経て京都大学に赴任。京都大学教授、京都短期大学教授・学長を務めた。京都大学名誉教授。
- 4) 有木純善氏は1929年生まれ。京都大学、信州大学を経て京都大学に赴任。京都大学教授、京都短期大学教授を務めた。
- 5) 北尾邦伸氏は1942年生まれ。京都大学助手、島根大学助教授を経て島根大学教授、京都学園大学教授を務めた。現在は島根大学名誉教授。
- 6) 村尾行一氏は1934年生まれ。林業経営研究所研究員、京都大学、東京大学を経て愛媛大学に赴任。愛媛大学教授を務めた。
- 7) 当時は「ゼミの時間になると、教授以下助教授、講師、そして二人の助手、さらには先輩の大学院生、同年の大学院生が多数、うち一人は韓国からの留学生、その上に学部生が5,6人という大人数が集まってきて、誰かが発表すると、その報告をめぐって、発表者と参加者とが議論するというだけでなく、発表者はそっちのけで、教官同士の議論が始まったり、と

- に角侃侃諤諤と言う表現がぴったりのような活気に満ちた議論が延々と続くのである」(井口、2006、6 頁)という様子であった。
- 8) 藤原三夫氏は 1949 年生まれ。京都大学、岐阜大学を経て愛媛大学に赴任。愛媛大学教授を務めた。
 - 9) 「京都大学における大学紛争は、昭和 44 (1969) 年に入るとともに寮問題を契機として全学的紛争へと発展するに至った」(京都大学百年史編集委員会、1998、603 頁)と紹介されている。
 - 10) 島根大学への赴任時の様子を井口 (2006) は「私は、修士課程の二年生の正月頃には、何とか就職したいと考えていましたので、その意思是半田先生に一応伝えてありました。そして島根大学の北川先生から助手を採用したいという相談があったのでいってみないかという打診があり、数日考えた末、そうしたいという返事をしました」(井口、2006、7 頁)と紹介している。また、北川泉氏は「この時、当時大学院生であった井口隆史さんに出会い (今は島根大学教授 (兼、演習林長) として活躍している)、彼を呼んでくれたのは大きな収穫でした。彼は昭和 44 年の大学紛争真只中に赴任して、もう 26 年にもなり本当に島大の大黒柱になってくれました」(北川、1995、2 頁)と述懐している。
 - 11) 井口隆史『公社造林論』京都大学博士論文、1987 年。井口 (2004) は「森林所有者の自営による造林事業が、補助や融資の措置が講じられてもなお資金や技術などの点で進めることが困難な場合に、国などの政策主体が、森林所有者に代わって民有林に直接造林を行なったり、地方公共団体に準ずる組織をつくり、それに造林事業を行わせることが必要である。前者が官行造林や県行造林等であり、後者が公団造林や公社造林である」(井口、2004、118 頁)と分取造林について整理している。分取造林は分取契約による造林であり、「分取林契約とは、他人の所有する土地 (主に林野) に造林し、育成した樹木を伐採して、その収益を造林者と土地所有者とが分取することを内容とする契約である」(中尾、1963、329 頁)。
 - 12) 2020 年農林業センサスの結果 (島根県) を所有山林面積別にみると～10 ha (413 経営体)、～50 ha (134 経営体)、～100 ha (37 経営体)、～500 ha (35 経営体)、500 ha～(20 経営体)であった (農林水産省大臣官房統計部、2022)。また、大山林地主とも称された、たたら御三家は田部家、絲原家、櫻井家のこと。その様子を井口 (1983) は「『出雲三名族』と呼ばれる T 家、I 家、S 家は、こうした鉄師達の頂点に位置する存在であり、それぞれ農地地主兼山林地主として飯石郡吉田村、仁多郡横田町及び仁多町という境を接する奥出雲地域の三町村に割拠していたのである」「彼らは、第 2 次大戦後の農地改革により、広大な耕地のほとんどすべてと、耕地に付随する採草地 (田附山) をも解放しているが、広大な林野の多くはその後に残ったのである。農地改革に加えて財産税、富裕税の支払いを山林処分 (立木のみ、あるいは林地とも) によって行ったため、膨大な林木蓄積とともに所有林野面積は減少したが、それでも T 家は約 7,500 ha、I 家は約 4,300 ha、S 家は約 4,000 ha の巨大な林野を持ち続けていたのである」(井口、1983、71 頁)と紹介している。
 - 13) 藤原三夫氏は井口隆史編著『国際化時代と「地域農・林業」の再構築』にも寄稿している。出版作業中の事故に対し「私たちの古くからの友人であった藤原三夫 (愛媛大学農学部) 教授が、去る 8 月 5 日、不慮の交通事故で逝去された。大変残念なことである。執筆者一同、心より哀悼の意を表し、謹んで本書をご霊前に捧げたい」(井口、2009b、371 頁)と悼んだ。
 - 14) 井口氏はかつて、「更新不可能な鉱石、石油等よりも更新・再生の可能な生物・有機物を重視し、そのストックの豊かさとして山村を、その循環的再生産を行う農林業こそ永続的生業であり、本来われわれが拠るべき「産業」である。そこにおいては、地域自給を基本とする経済が営まれ、その地域社会の基本的単位としては、小農家族による循環的複合経営がある。そして、それを補うものとして地域 (集落) がある」(井口、1989、11 頁)という見方を示している。そして、井口 (2009a) は「複合経営に対応した技術のあり方は、国内のどの研究機関においてもほとんど研究されていない。しかし、農+林+畜産 (山地の草資源を

- 利用した畜産：山地酪農、山地畜産）などの総合的な経営技術等の開発は必要であり、重要である。日本の試験・研究機関に期待したいのは、このような地域に密着し、地域資源を生かした技術の研究・開発である」（井口、2009a、52 頁）と今後の進展に期待している。
- 15) 島根大学農学部農林経済学科の 1 講座として林業経済学講座（教員 3 人）があった。林学科とも連携し「当時の林学科には森林計画学講座があり、希望する学生は森林経済学講座で指導を受けることも可能でした」（井口、2006、7 頁）。林業経済学講座は 1989 年の学部改組時になくなり、井口氏は生物生産科学科森林環境学講座（旧林学科）へ移籍した。また、この年から鳥取大学大学院連合農学研究科の構成大学として博士課程が設置された。そして、『林業経済』誌と『林業経済研究』誌の論文掲載動向を調べた井口（1999）は、「外国人研究者による単著あるいは外国人研究者が筆頭著者となっている共著論文は、80 年代には殆ど見られなかったものが、90 年代に入り増加している。また、連合大学院の院生と見られる外国人研究者と日本人研究者との連名論文が毎年掲載されるようになっている。このような傾向は、全国に連合大学院が設置され博士課程の院生が増加していることと、その院生の多くが外国人留学生であることを反映したものであろう」（井口、1999、80 頁）と連合大学院設置の影響を分析している。
 - 16) 西日本林業経済研究会は 1963 年（昭和 38 年）から開催されている（森田、1975）。「京大・九大・鹿児島大・宮崎大・島根大・鳥取大・愛媛大・高知大・三重大・岐阜大・静岡大・信州大・（山形大）」（井口、2019、19 頁）の各大学が参加している。
 - 17) 西日本林業経済研究会において、井口氏が退職する 2005 年度までに島根大学が幹事を担当したのは第 15 回（隠岐）、第 25 回（吉田村）、第 38 回（石見町）である（井口、2019）（大田、2020）。また、第 31 ～ 33 回（岡山県）は新たな運営方法を検討していた時期であった。
 - 18) 井口氏は 1970 年代・1980 年代に参加していた龍神林業研究と津山・勝山研究について、「林業問題を地域として捉え、その発展方法を考える「地域林政推進調査」を通じて、ようやく自分の研究スタイルと方向性がおぼろげながら見えてきたのがこの頃でした」（井口、2006、8 頁）と振り返っている。
 - 19) 正式名称は地域林政研究会。西日本林業経済研究会有志で 1980 年から 1986 年まで続けられた（井口、2019）。
 - 20) 2023 年 3 月 1 日のインタビューで調査方法について尋ねた際、「農家で聞き取りする言うても、農家のことが本当によく分かってなかったら、きちんとしたことはなかなか引き出せないからね。一度や二度行ったぐらいじゃ、分からないわね。経験を重ねることで、今の農家っていうのがこんなふうにやってるんだって、自分の聞き方はここを聞くということが大事だとかね、ここは絶対外したらいかんとか、何かそういうふうな積み重ねられるものが、だんだん自分に身についていくよね。それが、大事なところだわな」と教わった。自身の調査経験については「私の研究方法として、研究過程での農山村実態調査等の広汎な実施は、農山村の人々との交流であり、私にとってそれは楽しいものでした。過疎地域の人々、中山間地域の人々の生産や生活の実態を聞き取りすることは、私にとって大変楽しい体験であったし、それ以上に新しい知識を蓄積することにつながりました」（井口、2006、8 頁）と振り返っている。
 - 21) 胡霞氏は島根大学修士課程で勉強し、京都大学博士課程へ進学した。修士課程では、北川泉氏と井口隆史氏の指導を受けた。現在、中国人民大学教授。
 - 22) 中国との交流の始まりとなった 1987 年の訪中について「私と中国・寧夏とのつきあいは、一九八六年二月に留学生胡霞（回族の女性）が島根大学農学部に来てきたことに始まる。当時は、まだ留学生が珍しく、農林経済学科では確か二人目だったと記憶する。胡霞は八六年四月から大学院修士課程（林業経済学講座）に入り、北川教授が主指導、助教授であった私が副指導教官として面倒をみることになった。しかし、私はその五月から一〇ヶ月間の内地留学に京都大学へ出かけることになった」「私は島根大学から離れていたのに、その間の

- 経過は分からないが、とにかく、八七年の春休み中に現地調査をするということが固まっていた」(井口、2008、35-36 頁)と経緯を語っている。
- 23) 北川泉氏は 1931 年生まれ。島根農科大学を経て島根大学教授、島根大学学長 (1995 ～ 1999 年) を務めた。島根大学名誉教授。
 - 24) 島根大学・寧夏大学国際共同研究所は 2004 年に設置された。研究所の活動は伊藤 (2017) 等で紹介されている。
 - 25) 現地赴任時の様子は「島根大は 6 月から、中国・寧夏回族自治区にある寧夏大に設置した国際共同研究所に研究員 2 人を常駐させる。現地の状況に合わせた、実践的な研究・教育を進め、研究所を国際交流の拠点にしたいと期待している」(朝日新聞 2006 年 6 月 1 日、29 頁)と報道された。井口氏は 2010 年 3 月まで所長を務め、2008 年 3 月まで現地に駐在した (島根大学・寧夏大学国際共同研究所、2011)。
 - 26) 寧夏における調査を通して「寧夏南部は、成長する中国経済の中で、最も遅れた、あるいは取り残された地域であるといっても過言ではない。そうした地域の変化を二〇年近くにわたって観察してきたといえる。こうした地域の経済発展は、どのようにすれば可能なのか。また、どのような形で、あるいは内容での発展 (変化) が、この地域の人々が望むことなのか。従来考えられてきた、欧米式の発展の図式で、この地域の人々が望む「豊かさ」は獲得できるのか、簡単には答えが出てこないのである」(井口、2008、38-39 頁)と印象を語っている。

引用・参考文献

- 朝日新聞 (2006) 実践的研究へ 2 人派遣常駐 中国・寧夏大内施設 島根大。朝日新聞、2006 年 6 月 1 日: 29.
- 井口隆史 (1983) 奥出雲地域における林地の流動化と地域林業。山陰文化研究紀要, 23: 71-89.
- 井口隆史 (1989) 山村の再生と有機農業。山村研究年報。五箇村山村研究センター, 10: 1-11.
- 井口隆史 (1999) 林業経済研究の流れ。『農学研究の歩みと 21 世紀への展望』鳥取大学大学院連合農学研究科, 79-81.
- 井口隆史 (2004) 第 10 章 民有林造林政策。『森林政策学』(堺正紘編著) 日本林業調査会, 117-130.
- 井口隆史 (2006) 島根大学での教育・研究 37 年を振り返って。井口隆史先生退職記念講演会・祝賀会, 5-11.
- 井口隆史 (2008) 寧夏の人々との交流二〇年とこれから。『島根・寧夏学術交流の 20 年』(保母武彦・陳育寧編著) 島根大学・寧夏大学国際共同研究所, 35-42.
- 井口隆史 (2009a) 国際化時代と「地域農・林業」の再構築。『国際化時代と「地域農・林業」の再構築』(井口隆史編著) 日本林業調査会, 15-63.
- 井口隆史 (2009b) あとがき。『国際化時代と「地域農・林業」の再構築』(井口隆史編著) 日本林業調査会, 369-371.
- 井口隆史 (2019) 西日本林業経済研究会の歩み—第 1 回 (1963 年)～第 34 回 (1997 年)—。林業経済, 72(1): 18-28.
- 伊藤勝久 (2017) 序章。『中国農村における持続可能な地域づくり』今井出版, 6-15.
- 大田伊久雄 (2020) 西日本林業経済研究会の歩み—第 35 回 (1998 年)～第 56 回 (2019 年)—。林業経済, 73(4): 17-29.
- 北川泉 (1995) 地域研究と農山村活性化への課題—むら・まち遍歴 38 年の歩み—。『北川泉教授著作目録』北川泉教授退官記念事業会, 1-5.
- 京都大学百年史編集委員会 (1998) 第 2 項 昭和 44 年の紛争。『京都大学百年史: 総説編』(京都大学百年史編集委員会編) 京都大学後援会, 603-628.
- 島根大学・寧夏大学国際共同研究所 (2011) IV 研究所の組織 2008 ～ 2009 年度。島根大学・

- 寧夏大学国際共同研究所年報, 3 : 65.
- 中尾英俊 (1963) 分収林契約. 『契約法体系Ⅵ (特殊の契約 2)』有斐閣, 329-348.
- 農林水産省大臣官房統計部 (2022) 4 保有山林面積規模別経営体数. 2020 年農林業センサス
第 1 巻島根県統計書, 118-119.
- 峰尾恵人・松下幸司 (2017) 私の研究史〈半田 良一〉. 林業経済, 70 (5) : 1-14.
- 森田学 (1975) 西日本林業経済研究会の歩み. 林業経済研究会会報, 88 : 38-41.

(文責 : 大津裕貴、李婉、田中奈緒美)